

タンチョウ繁殖適地の土地利用変化に関する研究

北海道大学大学院 環境科学院  
環境起学専攻 人間・生態システムコース  
水本 兼仁

【背景】北海道に生息するタンチョウは絶滅危惧種であるが、近年個体数の増加に伴いその生息地の過密化が問題視されている。そのため、環境省はタンチョウの新たな繁殖地候補として 39 個所の適地を 2013 年 5 月に公表した。これらの適地は、環境省自然環境保全基礎調査の現存植生図と過去のタンチョウの営巣地点情報を使用した営巣適地推定モデルにより、営巣適度の高いと推定される個所として抽出されたものであるが、解析に使用した植生図が古く、一部では宅地等の開発により湿地植生（「ヨシクラス」と「ハンノキ群落」）の面積は減少していると考えられる（環境省，2010）。

【目的】そこで、繁殖適地内の植生や土地利用の変化を明らかにすること、また、タンチョウが既に繁殖適地を繁殖地等として使用しているかを明らかにすることを目的とした。

【手法】39 個所の繁殖適地内の状況について、直近の植生図との比較を行い、土地利用にどのような変化があるかを調査した。特に植生図上最もタンチョウの営巣地点が多かったとされる植生分類の「ヨシクラス」と「ハンノキ群落」については、GoogleEarth や国土地理院の空中写真を使用し、上記の植生が開発された年代を調査した。さらに、タンチョウが既に繁殖適地内を利用しているかについて、現地での生息調査及び地域住民の方等への聞き取り調査をした。

【結果と考察】「ヨシクラス」「ハンノキ群落」の面積は、農地や宅地等への開発により一部減少している。道央地域では、住宅地等へ開発されたことにより減少していて、道北・道東地域は牧草地として開発されていた個所が多かった。ただ、開発された年代を見ると、多くは 2005 年前後までに開発されていて、それ以降において大きく開発されている個所はほとんどなかった。2005 年前後以降で大きく開発されている個所としては、太陽光発電所として造成されている個所があったが、太陽光発電所への造成は、湿地植生からだけでなく牧草地であったところからも確認された。このような変化は、牧草地等を事実上の餌場としているタンチョウにとっては、潜在的な餌場の減少をもたらすかもしれない。その他、開発の程度が低かった個所について、その要因等について考察を行う。

現地調査を行った結果として、繁殖適地内で多くのタンチョウを発見した。ほとんどは牧草地内で採餌をしているところを発見したが、牧草地が餌場として重要な役割を果たしていると思われる。地域別に見ると、1 組を除き道東の繁殖適地内であったが、道北でも発見した。雛を連れたタンチョウのつがいを 5 組発見したが、これは繁殖適地内を既に「繁殖地」として利用している個体と推測される。また、聞き取り調査によりタンチョウの目撃情報を地域住民に聞いてみると、道東・道北だけでなく、道央でもいくつかの目撃情報が得られた。

【まとめ】繁殖適地内の「ヨシクラス」「ハンノキ群落」は開発により一部減少していたが、直近 10 年ではあまり開発されていない。ただし、最近 5 年程度の間には湿地植生や牧草地等が太陽光発電所に造成されていた個所がいくつかあり、このような造成は餌場の減少をもたらすかもしれない。また、既に多くの個所でタンチョウが繁殖適地を利用しているが、その一部は繁殖地として利用していると推測される。